

## 第2章 大正時代～昭和時代

### 1. 苦難の大正時代

三井慈善病院から泉橋慈善病院へ

大正8年(1919)4月、皇后陛下の行啓を仰いだことを記念して三井家が175万円を追加寄付し、維持基本金(基金)を300万円として病院の規模が拡張された。さらに組織を改正し、病院名を三井慈善病院から泉橋慈善病院に改称するとともに、多くの優良企業を育成した経営手腕を要する澁沢榮一を評議員に招いた。

『躋民寿域絵巻』

三井記念病院には『躋民寿域さいみんじゅいきえまき絵巻』と銘打った8枚に及ぶ絵巻が保存されている。三井家の倉庫に保存されていたものが平成2年(1990)頃に見つかり、三井記念病院に寄贈された。「大正六年七月」という日付と吉岡徹という画伯の筆になることが明記されている。

絵巻は、まず趣意として「明治参拾九年四月三井家総代男爵三井八郎右衛門氏汎ク貧困なる病者ノ為施療ヲナス目的を以テ金壱百萬円ヲ寄付シ民法ノ規定ニヨリ財団法人設立ノ挙アリ」云々との説明があり、当時の困窮者の生活の様子を8枚の絵で描いている。

各絵の題名と解説は次の通り。

#### ◇第一図「貧ト病」

東京市二百万ノ人口中一戸ノ豊数五疊以下ノ家ニ住スル者二十万乃至三十万ト称ス、一家五口トシテ一人一疊ノ割合ナリ、此ノ一家ノ家計亦月二、三十円ヲ要スト、故ニ二、三十円以下ノ月収ニシテ家ニ病者ヲ出ス者ハ到底療養ノ途無キコ

ト皆然リ

◇第二図「緩急相扶」

下層ノ者ハ互ニ相頼リ相扶クルコト上、中層ノ人々ヨリモ遥ニ厚キモノアリ即チ重症者アレバ隣人自ラ業ヲ休ミ荷車等ヲ賃シ病者ヲ施療病院ニ送ルモノ多シ



◇第三図「救ヒノ門」

三井慈善病院門前ノ掲示ニ曰ク「本院デ診察シテ上ゲマスノハ医師ノ診察ヲ受ケ薬ヲ買フ資力ノ無ク本當ノ困窮者ダケニ限ルノデス



○夫レデスカラ受附デ無資力者デ無イト認メマスレバ御断ワリヨシマス ○併シ急病人ヤ怪我人ニハ何方ニ限ラズ何時デモ御越ニナレバ応急ノ手当ヲシテ上ゲマス 勿論費用等ハ一切要リマセン

第一図「貧ト病」

◇第四図「外来ノ群集」

大正六年六月中外来患者一日平均  
新来 五十二人  
再来 四百四十六人  
合計 四百九十八人



第二図「緩急相扶」

◇第五図「恵ノ手」

医師 五十人  
薬剤師 六人  
事務員 五人

看護婦及ビ同講習生 百〇一人  
 合計 百六十二人

◇第六図「運搬車」

外来患者ノ多クハ入院ヲ希望スレドモ其ノ入院ハ一ニ医員ノ決定ニ俟ツ 現今  
 患者百人中僅ニ七人ノミ入院ヲ許サルル割合ナリ



第三図「救ヒノ門」



第四図「外来ノ群集」



第五図「恵ノ手」



第六図「運搬車」



第七図「病室」



第八図「積善ノ家ニハ余慶アリ」

#### ◇第七図「病室」

現在病床数 百三十一

一ニ看病ニ二葉ノ古諺今モ尚真理ナリ 本院ハ施療ノ外看護婦ノ養成ヲナス  
開院以来業ヲ卒ヘ免許ヲ下附セラレタルモノ既ニ百十二人ニ上ル

#### ◇第八図「積善ノ家ニハ余慶アリ」

開院以来即チ 自明治四十二年三月 至大正六年六月末日 八年三ヶ月ノ間ニ  
取扱シタル病者ノ数

新来患者 十五万千三百十三人 内入院施療一万三十九人

#### 関東大震災を乗り越える

大正12年(1923)9月1日、関東地方をマグニチュード7.9という大地震が襲った。死者・行方不明者約14万人、焼失家屋約44万7,000戸に及ぶ未曾有の災害となった関東大震災である。震災時、当時の泉橋慈善病院が作製したガリ版刷の『震災後ノ業務報告』(三井文庫所蔵)では大正12年(1923)9月1日から同年10月30日までの状況を下記の通り伝えている。



泉橋慈善病院

「職員以下その(患者)慰撫鎮静に務めおる折柄、裏手ミツワ化学試験所火を失し、折柄の南風にてたちまち同所は一面火となりしが、幸い付近の消防署よりポンプ数台来たり、二時鎮火したり。しかるに間もなく東隣の東京衛生試験所また出火したり。このとき消防署のポンプは、すでに丸ノ内の方面に去りて在らず。先刻より水道消火栓にホースを挿し入れ用意ありし本院消防隊は、ただちに水道の圧力不足なるを発見し、かねて備付けあるギャソリン・ポンプを操り、構内貯水タンクの水を利用し、いまだ大事に至らざるうち、たちまちこ

れを消し止むるをえたり。

木村院長、田代理事、船尾理事いずれも前刻よりその出先より本院に駆けつけ、付近の火の消防に成功したるを見て、一同安堵したり。

これより先、取り敢えず門前に天幕を張り、震災による傷者の応急手当を開始し、午後四時ごろまでに三十二人の手当てをなし、七人を入院せしめたり」

「日本橋および神田川向うより吹き寄せたる火の手は、南柳原河を焼き払い、和泉橋・美倉橋も危くなり、東は浅草橋通、西は御成通ともに火となり、火焰天に漲り遠近の爆音ますます甚しく、いよいよ危険の来迫を思い、まず患者を保護して安全の地に非難せしむる準備をなし、人を遣わして兼て本院非常時の避難所と定められある神田区練成小学校および下谷区徒士町小学校に交渉せしめ、そのあとより直ちに重症患者十五名を担架に載せ、看護婦取締・錦谷礼利以下、看護婦数名これを担い避難を開始したり。

やがて午後五時となり、風は変じて北西から東南に向かい吹き、火勢いよいよ猛烈となり、本院もついに延焼を免かざるべき状態にあるを認め人を上野寛永寺に馳せしめ、また前記両校に人を送りて、ただちに寛永寺に避難すべきを伝え、残存せる入院患者全部五十名を担架に載せ、なるべく陽のあるうちにと、歩行し得る者は徒歩せしめ医員関口、薬剤員野沢、事務員満沢、そのほか職員、看護婦付添い保護引率して、急ぎ上野公園に向かわしめ、なお職員および小使に風呂敷包、小車等にて重要書類、貴重品、器械等を搬出せしめ、この一行に随徒せしむ」

「一行約百五十名は非常なる雑踏裡を互いに相扶け助けて黒門町より上野公園に近づかんとせしも、群集のため入ること能わず。よって歩を転じて鶯谷方面に向かいしも、道路には車両、荷物、人馬いっばいに充満して少しも前進すること能わず、引き来たりし小車も、その載せおりし物品とともに道に捨て、岩倉鉄道学校(注・病院から約1.6km)構内に入り、暫時休息したるに、ここもまた次第に火焰の下となり、危険甚だしきをもって、ついに万難を排して公

園に入るの外なきこととなり、患者を扶助するに急なる余り、携帯しきたれる手荷物の大部分を構内に委棄して、鉄道線路を横切り、非常なる困難を冒し、極めて狭隘なる坂路をよじ、千辛万苦の後ようやく公園内に達することをえたり」

「この日(注・2日)午前十一時ごろ東隣衛生試験所の前、向柳原町は焼け、次第に北に燃えて中央劇場その他を舐め尽くし、前日の焼跡『ミツワ』化学試験所を回りて間もなく、病院裏手の向こう側、二長町一体を焼き払いたり。このとき残留諸員中一隊は、かねて命じおきし如く小車一両に必要な書類その他を積み焼跡の焦土を踏みて、これを本郷区内の安全地域に移出し次の一隊は病院内外の警固に任じ、他の一隊は専ら消防に当たり、寄宿舍の屋根に上がり『タンク』の水と『ギャソリン』の尽くるまでホースの手を緩めず消防したのだが、時あたかも風は北に向かって吹き、猛火の威力もやや衰え、ついに和泉町に延焼することなく、火は北に向かって趨り、病院およびその付近一廓は幸いにして天佑に因り全きをえたり」 ※現代仮名使いに直す、句読点を付す

## 風水害で特別診療

このほか、明治43年(1910)8月に発生した東京市内の水害に際して、罹災者のうち臨時救護した傷病者は、延3,981名(内入院患者237名)に達した。この臨時救護に要した費用8,155円は、三井家と三井各社の重役からの寄付金による。また大正6年(1917)の暴風雨に際しては、延1,286名(内入院患者78名)に特別診療を行った。

## 2. 皇族の患者慰問

### 皇后陛下が初の行啓

三井慈善病院は創立以来、広く社会に注目され、皇后陛下や皇族が数多く訪れてい

る。明治44年(1911)2月9日には宮殿下が訪れ、院内の各室を視察されたのをはじめ、大正6年(1917)1月3日には皇后陛下(後の貞明皇后)から患者一同に対して本綿、同裏地各104反と裁縫料75円のお下賜があった。さらに大正8年(1919)4月7日には当時の泉橋慈善病院の業務奨励のため皇后陛下の行啓があった。午前10時に到着されると、三井家同族、泉橋慈善病院評議員、理事、監事、各医長、主任が正門内の右側に整列し、職員、看護婦一同は和泉町通り南側に整列して歓迎した。皇后陛下のご到着後、泉橋慈善病院を代表して評議員会長の佐藤三吉(医学博士)が玄関先にお出迎え申し上げ、佐藤評議員会長の先導によって2階の便殿に



皇后陛下行啓の際の御座所



皇后陛下行啓の際の御馬車

入られた。御小憩の後、皇后陛下は佐藤評議員会長および全評議員、田代義徳院長、井上馨公爵夫妻等への拝謁を仰せ付けられた。この間、入院患者一同に御菓子料として金一封を賜わった。続いて田代院長の先導によって病室をはじめ、順次院内を御巡覧された後、再度便殿に入られ、佐藤評議員会長、田代院長に御奨励のお言葉をかけられた。また、三井家総代である三井八郎右衛門たかみね(高棟)に特別に拝謁が許された。御還啓の前には再び高棟に御菓子を賜った。

この日、下賜された金品は、泉橋慈善病院に御紋章入銀製花盛器、佐藤評議員会長と田代院長に白羽二重、三井家同族と佐藤評議員会長、評議員、理事、監事、田代院長に御菓子折、院歌を合唱した看護婦一同と作曲者の北村季晴氏に御菓子、入院患者108人に

御菓子料(金一封)であった。

泉橋慈善病院々歌

沼波武夫 作歌 / 北村季晴 作曲

(合 唱)	一、仁を説かざる聖無く	愛を説かざる教無し
	我が身のあるは人々に	我が眞心を尽す為
(甲部唱)	二、物に乏しき際にして	病める人こそあはれなれ
	葉を得べきすべも無く	窓洩る風を侘びて臥す
(乙部唱)	三、斯る同胞救はずて	進む医術を何かせむ
	弱きを助けいたはらで	豈に文明を称へ得む
(甲部唱)	四、三井の水の潔く	澤の黄金を擲ちて
	救ひの場を開きける	その眞心の尊さよ
(乙部唱)	五、此院に努めて人の道	遂ぐる我等の光榮や
	慈善の籌絶えざらば	世に悲しみの暗あらし
(合 唱)	六、仁を説かざる聖無く	愛を説かざる教なし
	我が身の在るは人々に	我が眞心を尽す為



皇后陛下行啓記念(大正8年)陛下賜銀製花盛器



## 関東大震災に際しての行啓、台臨

大正12年(1923)9月1日の関東大震災の後、9月19日午後2時に竹田宮妃殿下が皇族を代表して来院の上、罹災傷病者を慰問され、患者に御菓子を賜った。

同年9月29日午後1時には皇后陛下が来院の上、各病室を巡覧されて災傷病者を慰問された。皇后陛下は幼児、老人、妊婦等の患者を労わり怪我の様子や火傷の状態について一人ひとりにお尋ねになり、そのお慰めのお言葉に患者一同は感激した。同日、各宮妃殿下から患者一同に衣類を賜った。同年12月22日には皇后陛下より患者に対して冬に備えるとともに新年に際して着用するため、木綿衣を賜った。御下賜品は、本裁(男物48枚、女物49枚)、四ッ身(男物8枚、女物9枚)、一ッ身(19枚)。

さらに、昭和5年(1930)1月13日には高松宮殿下が来院され、院内各室を巡覧の後、御菓子料として金一封を御下賜された。同年6月5日には東久邇宮殿下が来院され、院内各室を巡覧された。

## 国務大臣及び宮内官の視察

明治43年(1910)7月22日に小松原文部大臣、同年11月5日に平田内務大臣、大正6年(1917)1月19日に大森皇后宮大夫、昭和3年(1928)9月24日に望月内務大臣、昭和5年(1930)3月12日に安達内務大臣が来院するなど、当初から国務大臣及び宮内官が視察に訪れている。

## 3. 激動の昭和期

### 創立30周年記念式挙行

昭和14年(1939)4月7日、泉橋慈善病院の創立30周年記念式が挙行された。この当日の様様を『泉橋慈善病院報告——自昭和14年1月1日、至12月31日』(三井文庫所蔵)で

下記の通り紹介している。

当日は「君が代」の斉唱に始まり、院務報告、挨拶、祝辞と続き、「泉橋慈善病院々歌」で締め括られた。祝典出席者の挨拶内容は次の通りである。

#### 佐藤三吉・評議員会長

「本院は病者の診療に支障を生ぜざる限り、医家の補修および研鑽の資料に供している次第であります。しこうして現在までに、4,876人の医師が来られたことになっております。すなわち本院は救療事業を基本といたしまして、医育事業にも貢献いたしているのであります。

当機関がこの如き顕著なる成績を挙げ、もって社会民生に貢献しえたることについては、まずもって創立者たる三井家の功德を記念いたさねばならぬことは申すまでもありませんが、これと同時に東京帝国大学医学部の多大のご後援と本院職員、看護婦等の忠勤および宮内省、厚生省、東京府のご奨励に対し厚き感謝を記念すべきことと思ひます」

#### 三井八郎右衛門<sup>たかきみ</sup>(高公)・三井家総代

「年を閲すること、ここに満30年、その間、時運の推移と世態の変遷とによる複雑せる社会に対応し、施業救療に従事し、いささか社会の福祉増進に貢献しえたるは欣幸とするところなり」

※現代仮名使いに直す

#### 泉橋慈善病院から三井厚生病院へ

その後、泉橋慈善病院では、再度三井家の社会事業であることをアピールする目的で昭和18年(1943)に三井厚生病院と改称し、昭和27年(1952)の社会福祉法人令施行に伴い社会福祉法人三井厚生病院へと改組している。

#### 東京大空襲

昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲によって三井厚生病院は開院以来の建物を消失した。当時の模様は昭和30年(1955)3月15日付の『三友新聞』紙面に紹介されている。その中で、大空襲当時、看護婦であった原田みさを、金子茂子、門多正の3名が当時を振

り返っている。

「大空襲は九日の夜行われ、同病院は三方火に囲まれ、一方が僅かに逃げ出せるだけになった。同病院の前にある凸版印刷の工場からは、南方占領地で使用する一万円、五千円の軍票紙幣が燃えながら雨のように降ってきた。宿直の医者はいよいよ患者の脱出を命令した。すでに十日の午前一時すぎ頃になっていた。

六十人からいた患者を担架に乗せ、火の子の降るなかを一人ずつ竹町の焼けあとに運んだ。金子さんの運んだ患者は焼けあとでふとんや着物を盗まれたりした。全部患者を運び出してから病院は焼けていった。すぐに朝になった。一睡もしない看護婦たちは、こんどは患者を東大の病院に収容するため、焼け野原を通り、半里以上もある道を湯島の坂を抜けて運んだ」